



■ 1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール2020

入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部

後援：法務省、外務省、文部科学省

1日も早い拉致被害者全員の救出にむけて！

北朝鮮人権侵害問題啓発週間 作文コンクール2020

入賞作品集

主催：政府拉致問題対策本部
後援：法務省、外務省、文部科学省

北朝鮮による拉致問題は、我が国の主権及び国民の生命と安全に関わる重大な問題であり、日本政府は、全ての拉致被害者の帰国を実現すべく、政府の総力を挙げて最大限の努力を続けております。

同時に、拉致問題の解決には、日本国民が心を一つにして、全ての拉致被害者の一日も早い帰国実現への強い意志を示すことが重要です。政府としては、拉致問題に関する啓発活動にも力を入れて取り組んでおります。特に、これまで拉致問題について触れる機会の少なかつた若い世代への啓発が重要な課題となっています。

かかる観点から、政府拉致問題対策本部では全国の中高生を対象に、拉致問題関連の映像作品や舞台劇の視聴、拉致問題関連書籍の読書等を通じて拉致問題を知つてもらい、拉致被害者やその御家族の心情を理解するとともに、拉致問題解決のために自分に何ができるのか、何をすべきかについて深く考える機会としていただくことを目的として、北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2020を実施いたしました。また、拉致問題に関して英語での発信力を備えた人材の育成を促すことを目的として、本年度から「英語エッセイ部門」を新設しました。

最優秀賞、優秀賞の受賞者に拉致現場を視察いただき、12月12日に行われた表彰式では最優秀賞受賞者のうち2名から視察時の感想を発表していただきました。

この度、応募された4069作品の中から、入賞作品を文集にしましたので、是非、御一読いただいただけますと幸甚です。

令和3年1月

政府拉致問題対策本部

**【作品総数】
4,069 作品**

中学生部門	2,957 作品
高校生部門	994 作品
英語エッセイ部門	118 作品

最終審査委員

北朝鮮による拉致被害者家族連絡会
横田 拓也 事務局長

日本経済新聞社
迫 宏治 執行役員
ニューヨーク大学
ロバート・ボイントン 教授
神戸大学大学院
ルックス・ジョン・マシュー准教授

法務省
山内 由光 大臣官房審議官
外務省
石月 英雄 アジア大洋州局参事官
文部科学省
蝦名 喜之 大臣官房審議官
内閣官房拉致問題対策本部事務局
岡本 宰 内閣審議官



表彰式の模様（2020年12月12日、東京都千代田区 イイノホール）

田 次

中学生部門									
最優秀賞	北朝鮮拉致	山口 心結	鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校2年						
優秀賞	私たちがするべきこと	高山 愛佳	岐阜県関市立緑ヶ丘中学校3年						
優秀賞	今、考えるべきこと	濁澤 美羽	静岡県静岡市立安東中学校3年						
特別賞	今、私たちにできること	今井 美月	岐阜県岐阜市立長良中学校3年						
特別賞	忘れない拉致問題	柳澤 歩実	東京都町田市立鶴川中学校3年						
特別賞	理不尽なことをさせないために	渡邊 翔	福島県いわき市立中央台北中学校1年						
高校生部門									
最優秀賞	「傍観者」から一歩踏み出せ	山口凜華	愛媛県立八幡浜北高等学校2年						
優秀賞	自由を取り戻す	南颯馬	千葉県私立敬愛学園高等学校1年						
優秀賞	私達は諦めない	宗宮まどか	岐阜県私立聖マリア女学院高等学校2年						
特別賞	現代を生きる私たちにできること	田中美緒	長崎県立諫早高等学校2年						
特別賞	拉致問題を風化させないために	平塚黎恩	東京都私立暁星中学・高等学校1年						
特別賞	残された時間	廣川裕也	千葉県私立敬愛学園高等学校2年						
英語エッセイ部門									
最優秀賞 (英文) <i>Abduction is not just a matter of Japan and North Korea:</i>									
It is a global issue									
平野 恵理	東京都立国際高等学校2年								
23	22	19	18	17	16	15	14		

(仮訳) 拉致は日本と北朝鮮だけの問題ではなく、グローバルな問題

中學生部門

最優秀賞

北朝鮮拉致

鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校2年

山口 心結

「信じられない。」

そう思った。私と同じ中学生。私と同じように大切な家族や友達がいて。大切にしてくれる人達がいて。何気ない会話が一番楽しくて。それが一瞬にして壊された。名前も分からぬ人に。そう考えると、胸がぎゅっとしめつけられた。同時に、学校に貼られているポスターを見ても他人事だと思って知らうとしたくなかった自分が怖くなつた。

拉致された横田めぐみさんの両親の気持ちは、きっと言葉で表しても表しきれないとと思う。大切な娘が拉致されたことも分からぬまま二十年間どんな思いで生活してきたか。拉致されたと分かり、どんな思いをしたか。他人の私でもこんなに悔しいのに、実の親である横田さんご夫妻の悲しみは計り知れない。めぐみさんに今の新しい日本を見せてあげたいという父、横田滋さんの願いは叶うことなく帰らぬ人となってしまった。もう時間がない。残された時間はわずか。では、私達にできることは何か。そもそも、中学生の私にできることなんてあるのだろうか。調べてみると、色々な対策が行われていた。しかし、私達が何かこれといった解決策を行うのは正直に言つて難しい。

なので、自分自身が今できることを三つ考えてみた。一つ目

は、自分の考えを深めることだ。インターネットで調べたり、テレビである特集などを見てみたりすると、過去にどんな事があったのか、現在どのような状況なのか、知らなかつたことを知ることができる。二つ目は、多くの人に知つてもいいことだ。「めぐみ」というアニメを見て私は、これをたくさん的人に見てもらいたいと思った。北朝鮮の拉致問題についてよく知らない友達に実際に教えた。すると、とてもびっくりして涙が出たと言つっていた。また、まさに今行つてゐるようすに拉致問題についての作文を書いてみたり、レポートや新聞を作つてみてもいいと思う。これなら私達にもできる。三つ目は、あたり前の中に隠れている幸せを大切にすることだ。家族と一緒に暮らすことのできる幸せ、友達と笑い合えることのできる幸せ、好きなテレビを見る事のできる幸せ、温かいご飯を食べることのできる幸せ。たくさんある。それを意識して生活することは簡単ではないが、自然とありがたみと感じられる人に私はなりたい。

拉致によつて自由を奪われた人の数は、一人や二人ではない。その家族も今もずっと苦しいながら必死に戦つている。もう一度と起きてはならない。拉致という自由を奪う行為を忘れないで、今自分自身にできることをやっていこうと思う。

優秀賞

私たちがするべきこと

岐阜県関市立緑ヶ丘中学校3年
高山 愛佳

私は毎日、自由に自分がしたい事をして生活しています。きっと戦争が終わった日本には、自由に暮らせる人しか居ないのだろうと思っていました。しかし先日、学校の社会の授業で、自分より幼かった十三才の横田めぐみさんが、無差別に北朝鮮に拉致された出来事を知りました。私はとても胸が痛くなりました。もし自分が…と考えても、自分の家族が…と考えてもとても苦しかったです。横田めぐみさん以外にも十六人も拉致された人がいると聞き、夏休みにインターネットを使って拉致問題について調べてみました。

まず「拉致問題」と聞くと随分と昔の事だと考えてしまって、ほんの四十年前の出来事なのだと知りました。より身近に感じたし、怖く思いました。横田めぐみさんと同じ様に、ほとんどの被害者は家族のもとに帰つてくることが出来ず、いるそこの被害者は「命以外、全部奪われました。」これは、蓮池薫さんという拉致被害者の方が言つた言葉です。この言葉を聞いて私は、人の一生の自由を奪つてまで利益は欲しくないし、同じ人間として信じられないと思いました。

そんな中、拉致被害者の家族方が「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」(家族会)を結成した事を知りました。家族を一人失う悲しみは、言葉にあらわせない程大きく、ご家族の方は苦

しい思いをされたはずです。それでも「思い出したくない出来事」ではなく「忘れられない出来事」として、きっとまた会えると信じる思いはとても強いと思いました。

この、現在も続いている拉致という問題に、私たちが出来る事はないか調べ、家族会の方々が街頭署名活動をしている事を知りました。岐阜県では令和二年度一月十一日に岐阜駅で行われるそうです。集められた署名は、被害者全員の帰国を実現するための世論喚起となるそうです。これは私たちが拉致被害者の方やそのご家族に協力できる活動だと思います。同じ日本人の仲間を助けるために参加したいです。また、授業で話を聞く前の私の様に、拉致問題が昔の話と思われるのではなく、と思います。被害者のご家族は、一日も忘れる事がないはずです。そのため、私たちもこの問題を知り、忘れない必要があります。

北朝鮮による日本人拉致問題は人権侵害であり、許される事ではありません。「人権」とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」であり、拉致はその権利を無視しています。

今回この作文を書くにあたって、拉致というあってはならない問題を知り、自分に出来る事を確認する事ができました。一刻も早い被害者全員の帰国と、帰国後の自由を願います。

優秀賞

今、やるべきこと

静岡県 静岡市立安東中学校3年

濁澤 美羽

北朝鮮の拉致問題について、貴方はどう考えているだろう

か。私は、この問題が過去のこととなりないよう、もっと沢山の人が関心を深めるべきだと強く感じている。

私が拉致問題に興味を抱いたのは、今年六月に報じられた横田滋さん逝去のニュースを目にしたときのこと。四十二年前に

北朝鮮に拉致された娘、横田めぐみさんとの再会が叶わなかつたことを知った。拉致が発覚してから約十八年。拉致被害者帰還を求める人々のシンボルといわれていた滋さんことを知り、自分もなにかしなければという強い衝動に駆られたのだ。

「行ってらっしゃい。」最後に交わしたのはいつもと何ら変わりない言葉。約二十五分間のアニメに詰め込まれた拉致問題の実態は想像を絶するものだった。アニメ「めぐみ」は滋さんと妻の早紀江さんの話を元に作成されている。映像を見ていて何度も感じたのは、胸が締めつけられるような苦しさだった。

「声どころか、身体中身動きが取れないような状況にされて、押さえつけられて。暗くなつてから船に乗せられたというのが拉致の実態です。」被害者の一人である蓮池薰さんはインタビューで当時の状況をこう語っている。中学一年生で被害に遭つたためぐみさん。拉致された当時の年齢が自分と近いこともあり、もし自分の身に起こつたら…と恐怖に身震いした。当たり前だったはずのめぐみさんの日常生活は、たつた一瞬で崩れてしまつたのだ。

私が一番驚いたのは、問題の発覚に約二十五年もの時間費したことだ。その間なんの手掛かりもない状況で、めぐみさんの帰りを待つことしかできない悲しみは家族以外の誰にも分かりえないものだと思った。

「行方不明」から「拉致問題」に一変したのは、私たちが生まれる三年前の九月十七日の日朝首脳会談のこと。北朝鮮は拉致を認め謝罪した。そして翌月には五人の被害者が帰国。様々な葛藤の中で、娘の帰りを信じて活動する滋さんにとっても一筋の光となつたはずだ。

現在に至るまで、拉致問題に大きな進展は見られない。私は今、この問題が風化しつつあるのではないかと感じている。横田めぐみさん一家の再会が叶わなかつた今だからこそ、私たちはこの問題をもっと重く捉えるべきではないか。「昔」の話として片付けるのではなく、「今」どうなつているのか関心をもつこと。学んだことを他の人に伝え繋ぐこと。今の私にできることは本当に小さなことかもしれない。でも私は信じている。些細な行動が未来を明るくするための材料となる日がくることを。拉致問題に対する関心が強まり、一刻も早く問題が解決することを強く願つている。

特別賞

今、私たちにできること

岐阜県岐阜市立長良中学校3年
今井 美月

拉致問題。私は、今までこの事実を知りながら、深く考えたことはありませんでした。そんな私が、拉致問題を知りたいと思つたきっかけは、横田滋さん逝去の報道を目にしたことでした。横田めぐみさんの拉致問題を調べるにあたり、最も私を驚かせたこと、それは、めぐみさんが拉致されたのが中学校の下校途中だったということです。誰もが過ごす何もない日常の中一瞬で全てを奪われてしまいました。これから何十年と笑顔で過ごすはずだった、めぐみさんとその御家族の幸せを北朝鮮の勝手な行動が奪つてしましました。めぐみさんは、誰にでも平等に流れる『時間』と大切な『家族』の一いつを同時に失いました。どんなことがあれど、家族と離れていい理由にはなりません。突如として大切な人と引き離された拉致被害者、被害者家族の悲しみや苦しみは私には想像もできません。でもそこには大きな悲しみや苦しみなど、私たちには計り知れない辛い感情があつたことだと思います。めぐみさん救出のため、活動し続けた滋さん、早紀江さん。そして拓也さん、哲也さん。その人たちの想いを今もなお、踏みにじり続ける北朝鮮を私は許せません。そして、絶対に許してはいけないと思います。

二〇一〇年六月五日横田滋さんが帰らぬ人となりました。めぐみさんと滋さんはもう会えません。大切な人ともう会うことできません。拉致問題は、多くの人の心を傷つけ、大切な人と

引き離しました。拉致問題を絶対に風化させてはいけません。この事実をより多くの人が知り、人事としてこの事実を捉えず、自分事として、重要な人権問題として考えることが大切だと私は思います。人権が守られたこの、ありふれた毎日こそが私達の幸せです。私達は、日常の幸せに早く気付かなければいけないので。そうすれば、今や世界中に蔓延するいじめや差別など、人権を侵害する行為を減らせるのではないか。私はもう一度、「言葉」のもつ意味を考えなければならぬと思います。私の発した言葉は、今までたくさんの人々の心を傷つけてきたかもしれません。私達の発する一言は、簡単に人の心を救うことができ、それと同時に、簡単に人の心を傷つけることができます。私は、自分の言葉のもつ力を自覚し、使つてていきたいです。私の周りでは、酷い言葉が使われてしまっているのが現状です。なぜなら、それが日常になってしまっているからです。一人一人の日常の幸せを守るためにも、そのあつてはならない日常を、私が変えたいです。そうして、人権を侵害するような言葉や、いじめを許さない社会をつくっていきます。そうすれば拉致問題についても、人権が侵害された重大な問題として捉える人が増えていくてほしい、そう願っています。私は、いじめを許しませんし、見逃しません。

特別賞

忘れない拉致問題

東京都町田市立鶴川中学校3年
柳澤 歩実

一〇一〇年六月五日、横田滋さんが亡くなつた。最後の最後まで、めぐみさんに再会することが叶わなかつたのだ。

私は、中学生になつて初めて拉致問題について理解した。ニュースで何度か目にしたことはあつたが、深くは考えなかつた。だからこそ、アニメ「めぐみ」を見たときは、衝撃でしかなかつた。めぐみさんはどれだけ怖かつただろうか。御家族はどうだけ心配だつただろうか。もし、自分が同じ目にあつていたら。そんなことを考えて、じるうちに、今の自分がとても幸せなのだと気づいた。

北朝鮮は何度も何度も嘘をついてきた。それは、残された御家族を苦しめる許されない行為だつた。そんな中、めぐみさんの写真が北朝鮮から送られたのだ。当然、世の人々は偽りの写真だと思った。しかし、滋さんは、右足を前に出して、少し斜めに肩を出しためぐみさんの姿を見て、「あ、めぐみだ。」と言つたのだ。それは、滋さんがめぐみさんに教えた、かつこよく写る姿勢そのものだつたのだ。私はこの話を聞いて、すごく胸がしめつけられた。どうして娘のことをこんなにも想つてゐるのに救われないのである。そう思つて仕方がなかつたのだ。

私がめぐみさんのような拉致被害者にしてあげられることは、拉致問題を忘れないこと、次の世代の人たちに伝えていく

ことだと思う。拉致問題を解決できるだけの力は持ち合わせていないため、直接できることは無いかもしない。けど、一番恐ろしいのは、この拉致問題に誰も見向きもせず、忘れさうれてしまつことだと思う。めぐみさん達から、自由や幸せを奪つたこの出来事を許してはいけないのだ。もう一度と、こんな悲劇を起させないためにも、大切な人の幸せを守るためにも、私達は、拉致被害者の帰国を願い、行動を起こさなければならぬ。拉致問題について考えることは、現在、少なくなつていいと思う。「自分には関係ない」と、どこかで思つていいのではないだろうか。たしかに、関係のないことかもしれない。しかし、日本国民として、一人の人間として、困つてている人を助けたいといふ気持ちが欠けていることは、恥である。学んで、知つて、伝えることはちつぽけなことだ。でも、みんながそれをすれば、大きく、強い力となると思つ。

特別賞

理不尽なことをやせないために

渡邊 翔

福島県いわき市立中央台北中学校1年

僕はこのコンクールに作品を出すにあたって、「妹よ」という本を読みました。この本の著者は、拉致被害者の兄で、被害者をめぐる国の人取りやその人達がどんなことをしてきたのかといふことも、詳しく書かれていました。

この人の妹、八重子さんが拉致されたのは突然のこと、港のことだったそうです。その後は行方も分からず、犯罪の可能性も低かったため、国どころか警察すら動いてくれませんでした。が、とある事件の犯人を育てたのが八重子さんだと分かりました。そしてその犯人が、北朝鮮の工作員だったのです。この事実を知ったマスコミは、あたかも八重子さんが「協力していた」というように報じたそうです。しばらく経つて、日朝会談を終えた外務省からいきなり、「妹さんは死んでいます。」

と言わされたそうです。ですがその証拠はいいかげんなもので、報告書は印刷したものを使っている上に、その墓はこう水で流されなくなつたと書いてありました。それを見た兄の繁雄さ

れが本のあらすじです。この本を読み終わった時、自分の頭に様々な考えが浮かびました。まず、マスコミの報じ方です。拉致された人を犯人のように言つではなく、その人と家族を労う報道をしていれば、その人達の心も少し軽くなつたでしょうし、家族会の活動もしやすかつたはずです。それに、政府ももっと真面目に活動したり、または家族会の援助等をしたりするべきだったと思います。そして、このような犯罪の認知度が低いことが最も、問題だと思います。もっとたくさん的人が真実を知り、一団となつて活動することが、この事件解決のカギになると思っています。

まだ今の段階ではできることも小さく、大きな力にはなれません。でも、一人前の大になれば家族会に入つたり、外務省の人や総理大臣になつてより意味のある日朝会談をすることができます。その日まで、八重子さんのような人達が一刻も早く楽になることを願っています。

僕はこのままでは何も進まないと想い、家族会(北朝鮮に拉致された人達を助ける会)に入会し、様々な国へ行き、協力を得たり、抗議活動をしたりしましたが、結局八重子さんは帰つてきませんでした。

高校生部門

最優秀賞

「傍観者」から一步踏み出せ

愛媛県立今治北高校2年

山口 凜華

「私は、拉致されたために生まれてきたわけではない」「彼女の想いを代筆するならば、私はこの一文に託す。

めぐみちゃん、と優しく呼ぶお母さん。いつも嬉しそうに私の写真を撮ってくれるお父さん。やんちゃだけど可愛い弟達。みんなは、私にとつてかけがえのない大切な家族。大好きなみんなに会いたい。会いたい。

昨年十一月、私は、新潟県のめぐみさん拉致現場を訪れた。閑静な住宅街が広がる、至つて普通の街並に見えた。しかし付近には、事件の情報提供を訴えるための看板が立てられており、異質を放っていた。アニメ「めぐみ」で見た光景と重なり、歩くにつれ胃の辺りがずしんと重く感じた。私が歩いたこの道で、めぐみさんの運命が変わった…。中学校から徒歩で下校中に拉致されためぐみさん。午後六時三十分に二人の友達と学校を出た後、未だ家に戻っていない。変わらない現状、変わらない苦しみ。時は無情に進み、一番恐れていったことが起こった。

—横田めぐみさんの父、横田滋さん永眠—

ニュース速報で飛び込んできた文字は、私を一気に震撼させた。滋さんは、十三歳のめぐみさんの記憶を塗り替えることができないまま旅立ってしまった…。滋さんの涙が私の涙と重なった。

滋さんのように再会できないまま「くなる拉致被害者家族

は珍しくない。私達多くの国民は、この事実に気づかないで、或いは知っていたとしても何も働きかけてこなかつた。滋さんの計報に日本中が涙を流しただろう。しかし一時的な涙は同情の域を脱せず、どこまでいっても他人事だ。四十三年間変わらぬい世に疑問を持たず、傍観し続けた結果が今である。悪いのは当然拉致をした側だが、それを正すべきは私達国民の責任でもあるのだ。

国の一題として大きく捉えつつも、一個人にできることは沢山ある。国際シンポジウムに参加し、世界中の拉致被害者家族の生の声を聞くこと。こうして作文にして想いを投稿することも、そのひとつだ。些細な事からでもいい、自分にできることを諦めてはいけない。この問題に終止符を打つためには、政府と連携する意思が国民一人一人に必要なのだ。今一度問う。「拉致」という不条理で非人道的な行為を、このまま黙つて風化させて良いのか? 答えは大きく「NO!」である。北朝鮮に拉致行為を認知、謝罪させ、今後二度とこのような過ちを起こさないと約束させる必要がある。誰もが当たり前に保障された人権を保有し、安心して暮らせる世界を。一刻も早く、全ての拉致被害者を解放しそれぞれが在るべき故郷へ。

「私達は自由を備えて生まれてきたはずだ!」

優秀賞

自由を取り戻す

千葉県私立敬愛学園高等学校1年

南颯馬

私は今まで、北朝鮮拉致問題について深く考えたことはありませんでした。それは、心のどこかで「自分とは関係のないことだ。」そう思っていたからにほかなりません。先日、この作文を書くにあたり、アニメ「めぐみ」を視聴しました。北朝鮮拉致問題の悲惨な実情を目の当たりにし、私の持っていたイメージがどれだけ生温かつたかを痛感しました。タンカーに入れられ、必死に助けを求めるめぐみさんの叫びを聞いて、とても人事とは思えませんでした。

二〇一〇年六月五日、めぐみさんの父である、横田滋さんがお亡くなりになりました。滋さんはめぐみさんの帰還を求める運動に後半生を捧げました。めぐみさんとの再会を果たせずにこの世を去った滋さんがどんなに無念でやるせない気持ちだつたか、私には計り知れません。しかし、私たちは滋さんのめぐみさんを助けたいという思いを受け継ぐことができます。

この問題を解決するにはまず、私たち国民が拉致問題に関心を持ち、自分の意見を発信することが重要だと考えます。より多くの人に拉致問題について知つてもう一つ手段としてSNSの活用が挙げられます。その一例として、政府主体のSNS上での意見交換会などが効果的だと思います。SNS上であれば、普段イベントなどに足を運ばない人や、対人が苦手な人でも参加でき、尚且つより多くの人とたくさん意見を交換する

ことができると思うからです。

拉致被害にあつてているのは日本人だけではありません。現在判明している拉致被害者の出身国は十四か国に上ります。拉致被害者を取り戻すにはこれらの国と協力する必要があります。私は拉致被害国で、あらゆる世界情勢に左右されない、拉致被害者を取り戻すという目的だけを持つた組織をつくることを提案します。拉致被害国が協力して国際社会に訴え続ければ、北朝鮮に対してかなりの圧力をかけることができると思います。

拉致は自由を奪う深刻な人権問題です。私たちはこの問題を重く受け止め、解決に向かわなければなりません。私は拉致問題解決のために今、自分ができることを考えました。一つはSNSを通じて拉致問題に関心を持つ人を増やすことです。今よりも多くの人が、拉致問題を「解決しなければならない問題」として意識することが解決への大きな前進になると思います。もう一つはブルーリボンバッジを着用することです。購入することで支援金を送れ、拉致被害者の帰還を求める意志表示にもなります。

北朝鮮拉致問題の解決を後押しするのは私たち一人一人の声と行動です。今こそ国民一人一人が声を上げ、他国と協力し、北朝鮮に立ち向かうときなのではないでしょうか。

優秀賞

私達は諦めない

岐阜県私立聖マリア女学院高等学校2年

宗宮 まどか

想像してみる。大切な家族や友人、恋人が拉致される。突然知らない国へ連れて行かれる。北朝鮮による拉致問題は他人事として考えてはいけない。

私が拉致問題について考えるきっかけになつたのは十歳の頃、新潟空港で見たパネル展だった。そこで見たアニメ「めぐみ」は幼かつた私にとって衝撃で、当時感じた恐怖は今でも覚えている。先日、横田滋さんが亡くなつたというニュースが飛び込んできた。今、高校生の私にできることを考えた。

ご家族は今もずっと彼らの帰りを諦めずに待ち続けてみえる。ご家族の高齢化が進み、子供との再会を果たせないまま亡くなつた親は一〇〇一年の日朝首脳会談以降でも八人いらっしゃる。今年一〇一〇年、横田滋さん、有本嘉代子さんが娘との再会を果たせず亡くなつた。有本さんはメッセージの中で「恵子が帰るまでは元気でいた」とおっしゃっていた。胸が痛くなつた。北朝鮮による拉致問題は出来る限り早く解決させる必要がある。

私達高校生にできることは拉致問題について知り、調べて理解することだ。横田めぐみさんが拉致されたのは十三歳の時である。この事実を同じ世代の人達が知り、当事者意識をもつことが大切である。そうすれば、若い世代の関心が薄れているのを防ぐだろう。毎年十二月十日から十六日までの「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」をさらに浸透させる必要がある。この週間

を使い、学校において拉致問題について学び、意見を交流する場を設けるべきだ。小中学生誰もが拉致問題を知ることができるように、教育課程に一時間でいいので組み込んでもらいたい。学生達が拉致問題を知り、考えるきっかけをつくることは問題解決への一步になる。

私の伯母はめぐみさんが行方不明になつた一九七七年、十歳であった。伯母が高校生の時、新潟県ではめぐみさんが北朝鮮に拉致されたという噂がすでにあつたが、正式に拉致の情報が入つたのは何年も後のことだつたという。伯母は当時、その噂を深く考えずに話題にするだけだつた。もしあの頃、自分達が報道機関や政府に調査するよう要望して世論が動いたら、何か変わっていたかもしれないと伯母は今、後悔している。国の仕事、大人の仕事と捉えず、発信していくことが私達若い世代の使命のように思う。例えば、SNSは意見を発信する良い方法である。政治的な内容は賛同だけでなく批判も出てしまつが、議論を起こすことで、拉致問題が認知され、風化を防ぐ手助けになるはずだ。

私達にできること。まず一人一人が北朝鮮の拉致問題について知ろう。そして意見をもとづく。そしてそれを発信しよう。それを継続し大きな力にしよう。問題が解決するまで、私達は決して諦めない。

特別賞

現代を生きる私たむけにでやるいと

長崎県立諫早高等学校2年
田中 美緒

今回初めて、アニメ「めぐみ」を見た。暗くて狭くて寒い船の中、お父さん、お母さんに助けを求めて壁を引っ掻いた血まみれの指。横田めぐみさんが拉致されて四十年以上の月日が経つた。しかし、めぐみさんは未だに帰ってこない。

私が拉致問題について調べたのは今回が初めてだった。めぐみさんが拉致されたのは私が生まれるよりも前のこと。名前を聞いたことがある程度で、深く考えたことは生まれてから一度もなかった。興味がなかった。私には関係ないことだと思っていた。でもそれは違った。

家族五人、仲良く毎日普通の幸せを感じながら過ごしていた。私もめぐみさんと同じ五人家族でバドミントン部、そして長女だ。だからなのか、めぐみさんは親近感みたいなものを感じた。と同時に胸がしめつけられた。どれだけ怖かっただろう、苦しかつただろう、寂しかつただろう。自分がどれほど幸せな生活を送っているか身にしみて感じた。今の私よりも小さい女の子がこんな事に巻き込まれるなんて。

被害者はめぐみさんだけではなかった。他にも確認されているだけで十七名。本当はもっといるかも知れない。その全員が一瞬で日常を奪われた。人生を狂わされた。こんなことがあっていけないと強く確信した。

内閣府の調査によると十八～二十九歳の日本人拉致問題に対する関心は令和元年は前年よりも低下している。このままだと何も知らない若者が増えてくるだろう。では私たちにできることはないのだろうか。いや、あるに違いない。

まずは知ることだ。全国的に見て、アニメ「めぐみ」を授業で見る学校は少ないそうだ。授業で「めぐみ」を見て意見を交換し合うというはどうだろう。授業で扱つと、全員がこの問題を知ることができる。そして考えることができます。自主的に調べ、周りに伝えることができる。現代ではSNSという便利なツールもある。知る、考える、周りに広める。それだけでも多くの人がこの問題に関心をもつことができる。知ることが拉致被害者全員の救出の第一歩となる。

今年六月、めぐみさんの父、滋さんが亡くなつた。娘に会えなかつたことがどれだけ悔しかつただろう。私には到底味わうことができない感情だ。しかし、日本人拉致問題はまだ終わっていない。この問題を世間から風化させてはいけない。現在も政府は救出に励んでしる。日本一丸となつて被害者、被害者家族の笑顔を取り戻そではないか！めぐみさん、被害者のみなさんが何気ない幸せを感じ、笑顔で過ごせる日が一日も早く訪れることがあります。私は信じ続け、そして行動し続ける。

特別賞

拉致問題を風化させないために

東京都私立暁星高等学校1年
平塚 紗恩

もし、急に家族がいなくなつてしまつたらと、考えたことがあるだろうか？「じつてらっしゃい」と見送られ、そのまま一度と家に戻ることができず、異国に連れ去られてしまつたら、自分ならどうするだらう。幸せに暮らしてきたのに、ある日突然家族と引き離される悲しみ。そう考えただけでも恐ろしい。

それが、一九七〇年代～一九八〇年代に起つた、北朝鮮に拉致された多くの日本人の現実だ。私は、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんのアニメ「めぐみ」を、初めて視聴した。ニュースで北朝鮮の拉致問題を聞いた事はあつたが、一つのニュースとして捉えていただけで、現実として受け止めていない事を恥ずかしく思つた。「めぐみ」には、横田さん家族のめぐみへの深い愛情と、拉致されてから今までに続く苦悩と忍耐が描かれている。北朝鮮による拉致被害者として、日本政府が認定した被害者は一七名、拉致の可能性が排除できない者として八八三名いる。北朝鮮は、被害者のうち八名は死亡で、死因は不自然、曖昧な点が多く、めぐみさんに至つては、鑑定後遺骨は別人であった。北朝鮮の主張は、「死んだ被害者を生き返らせると無理な要求をしている」と言つているが、あまりにも勝手な主張である。日本だけでなく、世界の国々で多くの人が拉致されており、これは国連でも取り上げられている人権侵害問題だ。

北朝鮮拉致問題を、多くの人に知つてもいい機会を考えた。一つは、全国小・中学校、高等学校に配布されているアニメ「めぐみ」の上映数が少なく、高校に至つては約十五%らしい。是非、授業で扱つてもらい、人として生きる権利を学び、拉致問題を考える教材として活用してもらつ。二つめは、高校生・大学生の若い世代だけの署名活動運動を発足できないだらうか。また、拉致問題を考える集会は、内容が難しい場合もあるので、小学生でもわかるよう、各地域の会を作り、拉致問題を知つてもらう。三つめは、拉致被害者を支援するブルーリボンバッジを、赤い羽根の「地域歳末たすけあい運動」と同じように、広めにく活動をすることができないかと考えた。SNSでメッセージを発信し、若い世代が中心となつて活動をしていくことが、この問題を知つてもらう良い機会ではないかと思つ。

今、私達にできることは、拉致問題を風化させないことである。めぐみさんがいなくなつてから、今年の十一月で四十三年。どんなに苦しく、悲しい長い年月だつたろう。だが、拉致被害者家族の苦しみはまだ終わっていない。拉致された人が全員帰つてくる日が来るまで、多くの人の助けが必要だ。必ず被害者を取り戻す」といつ、その声を上げ続けていくことを忘れてはならない。

特別賞

残された時間

千葉県私立敬愛学園高等学校2年

廣川 裕也

拉致問題が世間に公表されてから四十年もの時間が経過した今なお、解決には至っていない。遺族の幾度にもなる講演会や毎週日曜日に行われるSNSでの活動も虚しく、現状打破への道は険しいままだ。そして先日、遺族の方々の一人である横田滋さんが亡くなられてしまい、苦境の果てに立たされてしまった。

私はこの作文に書く上で再度「めぐみ」を視聴し胸が張り裂けそうな思いに襲われた。かけがえのない生活が突然根こそぎ奪われ、束縛された時間の中で生きることがどれほど心苦しいものであったかは想像すらできない。一刻も早く被害者が返還され、遺族の方の元に戻ることを更に強く願う。

この耐え難い状況を変えるためには多くの国民、世界の人々が認知しなければならない。そのための策として私がまず提案したいのは広告塔を立て、世界の人々に訴えることである。具体的な方法として被害国全員で協力した映画を製作し、世界中に向けて発信することを私は提案したい。今だからこそ拉致問題を世界へ向けて訴えかけることに価値があるのではないか。この他世界的有名なティーラガガやXジャパンのYOSHIOKEなどが歌で訴えるのも良い方法である。映画や歌唱という手段を用いることで、一定数の集客は見込め、優れた歌手をして俳優や女優を起用すればより多くの人々に拉致問題が認

識されることに繋がる。この拉致問題解決を実現させるために他国との連携は最早必要不可欠である。だからこそ映画、音楽を通して世界一丸となりこの人権問題に立ち向かっていかなければならないのである。

二〇〇一年五月、当時の総理大臣小泉純一郎氏が訪朝し、金正日委員長との直接会談に臨み、その結果同じく二〇〇一年十月、五名の被害者が無事帰国することが出来た。しかし、その後は度重なる政治家や有識者による会談が繰り返されてきたものの帰国実現には至っていない。つまり、日本のトップが直接動くことがいかに大切かがわかるのである。生前横田滋さんは千回を超える講演会を通して私達に訴え続けた。今も家族会や全国協議会など声を上げ続けている人々がいる。二〇一〇年八月末、安倍晋三首相は辞任会見において拉致問題について「痛恨の極み」と語った。解決には至らずとも世界各国と連携をとり、外交において大きな功績を残した。約七年に渡つて日本を支え任期が残っていたものの体調を考慮し辞任された。

今はもう待つときでなく動くときである。官民区別なく他人事としてではなく、自分のこととして臨むことしか解決の道はないと思ふ。安倍晋三首相が残した「痛恨の極み」という言葉。この無念の思いを今こそ晴らすときである。

英語エッセイ部門

最優秀賞

Abduction is not just a matter of Japan and North Korea: It is a global issue

HIRANO Eri

11th grade,
Tokyo Metropolitan Kokusai High School

North Korea's abductions of Japanese nationals have long been an outstanding issue between the two countries. According to the Japanese government, 17 Japanese citizens are identified as abduction victims. Five of them were repatriated in 2002 after then-North Korean leader Kim Jong Il admitted to the abductions. The abductees are allegedly compelled to train North Korean spies with the Japanese language, customs and culture. Abduction is a deprivation of human rights and freedom, and it reflects Pyongyang's contempt toward humanity and the international community.

Amid a lack of tangible progress of the issue, Japan lost one of the strongest advocates this year. Shigeru Yokota , the father of Megumi Yokota who was kidnapped by North Korean agents at age 13 in 1977, passed away. He and his wife, Sakie Yokota, called for the return of their loving daughter and other abductees for more than 40 years which left a significant impact in Japan and the world in terms of disseminating information about the North Korean abduction. I could never imagine the pain Mr. and Mrs. Yokota suffered for not being able to see Megumi for so long.

In the absence of diplomatic ties between Japan and North Korea, I think that reinforcing coordination with the United States, China and South Korea, countries that can influence North Korea, is vital for pushing forward the issue. Recognizing the North Korean abduction as a "global issue" and putting stronger international pressure on the country could force North Korean leader Kim Jong Un to resolve this human rights violation. As Japanese Prime Minister Yoshihide Suga said in his video address to the United Nations General Assembly on September 26, we have no time to lose as the families of the victims continue to age. Prime Minister Suga also said he is ready to meet with Mr. Kim "without any conditions."

As a minor, what I can do for the abduction issue may be limited. However, I believe that delivering messages of the tragedy through this essay and discussing with my friends and other youths abroad could enhance awareness of the issue. Encouraging people to closely watch Pyongyang's development of nuclear weapons and missiles, which pose a threat to the international community, is also important to promote understanding on what kind of a country North Korea is.

Since I spent a part of my childhood in Beijing, I have a great interest in Japan's relations with China and diplomatic issues in broader Asia. I also like South Korean entertainment culture, so I have been studying the Korean and Chinese languages in addition to English. I believe learning the Korean language is a good way to know North Korea's perspectives on the abductions of Japanese nationals, regional security, and other issues. I would like to continue such studies so I can hopefully contribute to a resolution of the abduction issue.

最優秀賞

拉致は日本と北朝鮮だけの問題ではなく、 グローバルな問題

平野 恵理

東京都立国際高等学校 2年

北朝鮮による日本人拉致問題は、長い間二国間で未解決の問題となっています。日本政府は、17名の日本人を拉致被害者として認定しています。そのうちの5名については、北朝鮮の指導者・金正日が拉致を認めた2002年に帰国が実現しました。拉致被害者らは、北朝鮮のスパイに日本の言語や慣習、文化を教え込むよう強制されていたとされています。拉致は人権や自由を奪う行為であり、北朝鮮政府がいかに人道や国際社会を軽視しているかを表しています。

拉致問題の具体的な進展が見られない中、日本は今年、この問題を最も強く訴えてきた方の一人を失いました。1977年に北朝鮮の工作員によって誘拐された当時13歳の横田めぐみさんの父、横田滋さんがお亡くなりになりました。滋さんとその妻・早紀江さんは、40年以上にわたって最愛の娘と他の拉致被害者の帰国を求めてきました。横田さんらの活動は、北朝鮮による拉致問題に関する情報を発信し続けたという点で、日本と世界に大きな影響を与えました。これほど長い間めぐみさんとの再会がかなわず苦悩してきた横田さんご夫妻の辛さは想像を絶するものがあります。

日本と北朝鮮の間に外交関係がない現状では、米国、中国、韓国等の北朝鮮に影響力を持ち得る国々との連携を強化することが、問題の進展に不可欠であると思います。北朝鮮による拉致問題を「グローバルな問題」として認識し、同国への国際的圧力を一層強めていくことで、北朝鮮の指導者・金正恩に、この人権侵害の解決を迫ることができる可能性があります。9月26日、日本の菅義偉首相が国連総会でのビデオ演説で述べたとおり、拉致被害者のご家族がご高齢となる中、拉致問題の解決には一刻の猶予もありません。菅総理は、「条件をつけずに」金正恩委員長と会う用意があるとも述べました。

未成年者である私が、拉致問題のためにできることは限られているかもしれません。しかし、今回の作文を通じてこの悲劇的事件について伝え、友人や海外の若者とも議論を重ねることが、拉致問題への意識向上につながると確信しています。北朝鮮政府による核兵器やミサイルの開発は国際社会への脅威となっており、その動向を注視するよう人々に呼び掛けていくことは、北朝鮮が一体どのような国なのかという理解を深める上でも重要なことです。

私は幼少期の一部を北京で過ごしたことから、日本と中国の関係やアジア全体の外交問題に大きな関心があります。また、韓国のエンターテイメント文化が好きなので、英語の他に韓国語と中国語も勉強しています。韓国語を学ぶことは、日本人拉致や地域の安全保障などの問題に対して北朝鮮がどう見ているのかを知る良い手段だと思っています。こうした勉強を続けることで、私も拉致問題の解決に貢献できるようになれば幸いです。

この作品集は令和2年、政府拉致問題対策本部の主催により実施された
「北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール2020」応募作品の中から
入賞作品を収録したものです。
文中の表現や表記は、原則として応募時の表記に従いました。

北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール 2020 入賞作品集

令和3年1月発行

【発行】

政府拉致問題対策本部
〒100-8968 東京都千代田区永田町1-6-1
TEL:03-3581-8898
<https://www.rachi.go.jp>



令和3年1月発行